

近畿の耕畜連携をめぐる状況 —水田飼料作を中心に—



近畿農政局



配合飼料価格に影響を与える要因の価格動向

- とうもろこしの国際価格は、令和2年8月頃まではエタノール向け需要の減少等を背景に3ドル/ブッシェル台前半で推移していたが、9月以降、中国における需要増加やコロナ禍からの経済回復等により上昇。令和3年4月末には約8年振りに7ドル/ブッシェルを突破。その後、5ドル/ブッシェル前後まで下降したが、ウクライナ情勢を受けて上昇し4月には8ドル/ブッシェルを突破。その後需給ひっ迫の懸念が後退し一時下降したものの、米国の収量が下方修正されたこと等を受け、令和4年9月現在は7ドル/ブッシェル台で推移。
- 大豆油かすの国際価格は、令和2年4月以降、概ね300ドル/ショートンを下回って推移していたが、9月以降、中国の飼料需要の拡大等により上昇。令和4年9月現在は400ドル/ショートン中盤で推移。
- 海上運賃(フレート)は、船腹需要の減少によって令和2年5月には40ドル/トンを下回っていたが、以降は需要の増加により上昇し、令和3年10月には79ドル/トンまで上昇。その後船腹需要の減少等の影響で、令和4年9月現在は49ドル/トン程度まで下降。
- 為替相場は、令和2年夏以降、円高傾向で推移していたが、直近では円安傾向となり、令和4年9月現在は142円/ドル程度まで上昇。

＜とうもろこしのシカゴ相場の推移(期近物)＞



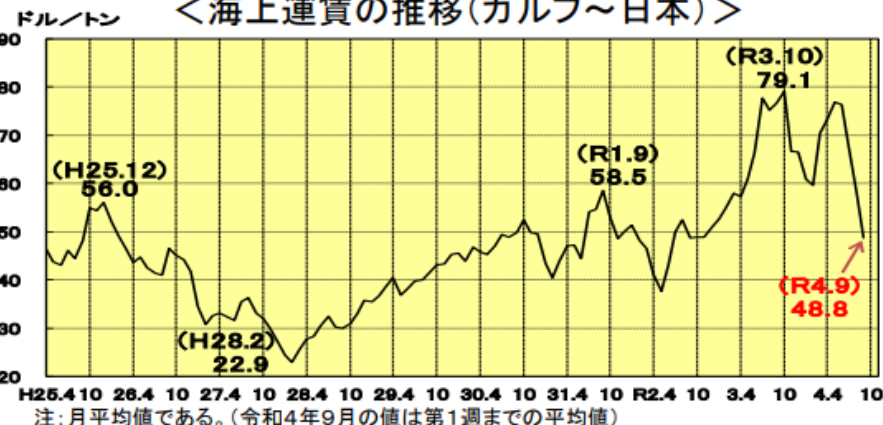
注:シカゴ相場の日々の終値である。※1ブッシェル=25.4kg

＜大豆油かすのシカゴ相場の推移(期近物)＞



注:シカゴ相場の日々の終値である。※1ショートトン=907.2kg

＜海上運賃の推移(ガルフ～日本)＞



注:月平均値である。(令和4年9月の値は第1週までの平均値)

＜為替相場の推移＞



注:日々の中心値の月平均である。(令和4年9月の値は13日までの平均値)

乾牧草の輸入・価格動向

- 乾牧草の輸入量は、年間180万～200万トン程度で推移。輸入先については、米国が7割、豪州が2割、カナダが1割弱と輸入量のほとんどを3カ国が占める。
- 乾牧草の輸入価格（通関価格）は、直近では、60.4円/kg（令和4年7月現在）。
- 新型コロナの影響で滞船やコンテナ不足が生じ、特に令和3年10～12月に輸入量が前年同月を下回ったが、その後回復し、年度全体の輸入量は平年並み。なお、コンテナ船の運航が不安定な状況は継続。

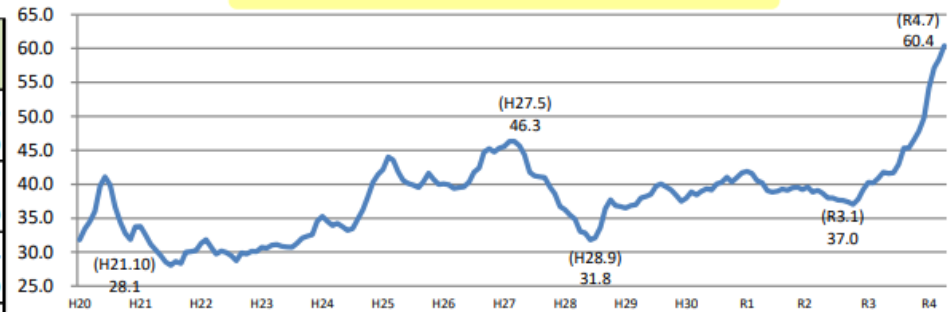
上段：輸入量（千トン）
下段：輸入シェア（%）

乾牧草の国別輸入量の推移

年 度	米国	豪州	カナダ	その他	うちロシア	合計 （前年比）
H25	1,441 (73.7)	363 (18.6)	133 (6.8)	18 (0.9)		1,955 (90%)
H26	1,319 (72.2)	369 (20.2)	128 (7.0)	11 (0.6)		1,827 (93%)
H27	1,318 (71.9)	380 (20.7)	108 (5.9)	28 (1.5)		1,834 (100%)
H28	1,364 (73.1)	367 (19.6)	106 (5.7)	29 (1.6)		1,866 (102%)
H29	1,362 (70.3)	400 (20.6)	142 (7.3)	34 (1.8)	0.05 (0.0)	1,938 (104%)
H30	1,394 (68.3)	455 (22.3)	146 (7.2)	44 (2.2)	2.85 (0.1)	2,039 (105%)
R1	1,440 (71.3)	403 (19.9)	130 (6.4)	48 (2.4)		2,021 (99%)
R2 （確々報値）	1,413 (69.8)	402 (19.9)	156 (7.7)	54 (2.7)	0.05 (0.0)	2,026 (100%)
R3 （確報値）	1,340 (64.1)	489 (23.4)	191 (9.1)	71 (3.4)	0.39 (0.0)	2,091 (103%)
R4 （4月～7月） （速報値）	511 (64.7)	181 (22.9)	69 (8.7)	30 (3.8)	0.02 (0.0)	790 (100%)

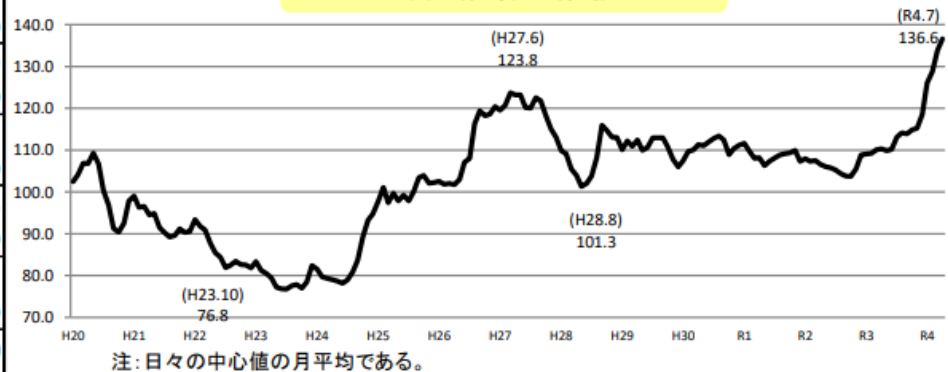
（円/kg）

乾牧草の輸入価格（通関価格）



（円/ドル）

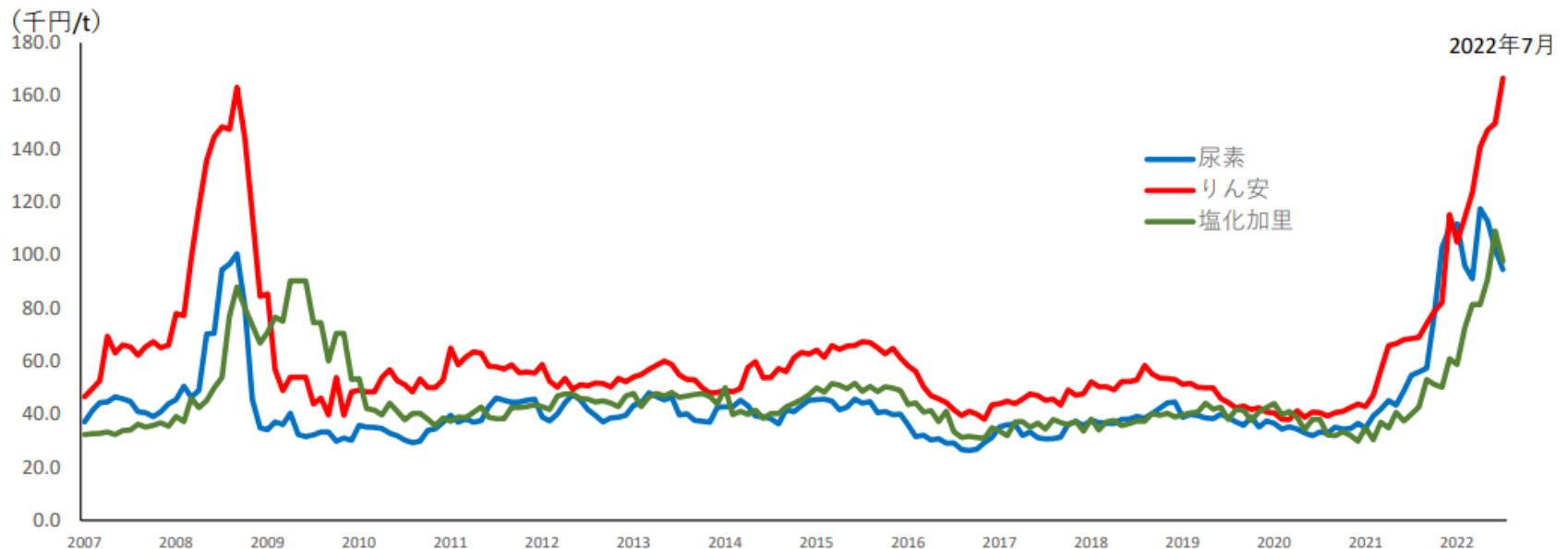
為替相場の推移



肥料価格の推移

- 肥料原料の輸入価格は、昨年半ばより高騰。
- こうした中、昨年10月以降、中国が肥料原料の輸出検査を厳格化し、我が国の肥料原料の輸入が停滞。
これを受け、協調買入の要請や資源代替国との資源外交を行い、本年の春用肥料は例年並みに近い供給量を確保。
- 本年の秋用肥料についても、調達国の多角化等に向けた取組を実施したところ。

肥料原料の輸入価格の推移



※ 農林水産省調べ
財務省貿易統計における各原料の輸入額を輸入量で除して算出。
ただし、月当たりの輸入量が5,000t以下の月は前月の価格を表記。

近畿耕畜連携イニシアチブ



近畿農政局における耕畜連携イニシアチブの立ち上げについて

農林水産省では、みどりの食料システム戦略を展開し、生産現場や流通段階における環境負荷の低減、脱炭素への支援に取り組んでいます。

他方で、肥料・飼料の動向をみると地政学的な国際情勢や為替レートの変化等を背景に肥料・飼料価格が高騰しています。

このような中、耕種農家と畜産農家とが連携し飼料作物と堆肥を循環させる耕畜連携の重要性が、益々、高まっております。

近畿農政局では、管内における耕畜連携を積極的に進め、みどりの食料システム戦略に資するとともに、肥料・飼料の安定供給を目指して、令和4年1月、プロジェクトチーム「近畿耕畜連携イニシアチブ」を立ち上げました。

同イニシアチブでは、地域の実態や課題を明らかにした上で、耕種・畜産両サイドの相互理解を深めることにより、支援体制の強化と持続的な取組の拡大に取り組みます。

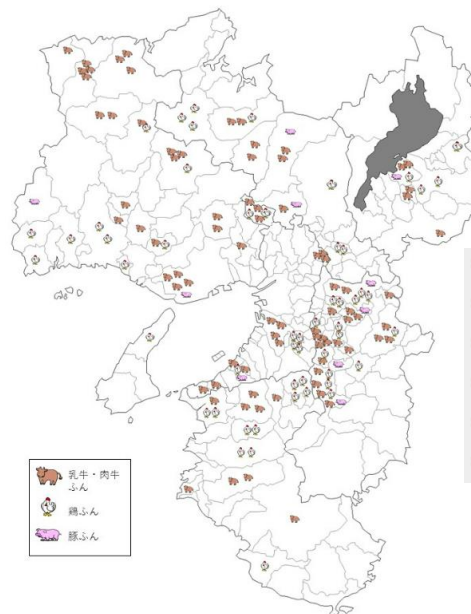
基本的な視点

- 国内資源の最大活用
- 府県・市町村、生産者組織等の関係機関における認識の共有
- 飼料や堆肥の供給側だけでなく、利用側にとっての利害も重視
- 府県内の地域の実情に応じた作業・役割分担、支援組織等のあり方

具体的なアクション

- 耕畜連携の取組事例やマッチング手法等の検証（現地でのヒアリング・調査、アンケートの実施等）
- 新技術の導入と支援措置の活用促進
- 潜在的ニーズの掘り起こしとマッチングの拡大

近畿管内の堆肥生産者リスト



- [滋賀県（滋賀県ホームページ）](#)
- [京都府（京都府ホームページ）](#)
- [大阪府（大阪府ホームページ）](#)
- [兵庫県（兵庫県畜産協会ホームページ）](#)
- [奈良県（奈良県ホームページ）](#)
- [和歌山県（畜産協会わかやまホームページ）](#)

【飼料関係】

- 近畿における飼料作は水田主体であり、既存の機械体系で生産可能な飼料用米やWCS用稲が過半。保管場所の確保・整備が課題。
- 牛飼養農家はWCS用稲の利用拡大への期待が大きいが、専用機械を有する収穫・調製の担い手（支援組織等）の確保が課題。

【堆肥関係】

- 耕種農家における堆肥利用上の大きなネックは、運搬・散布に係る労力とコスト。
- 特に、臭いが少なく広域流通が可能なペレット堆肥への期待が大きいが、誰が機械・施設を導入し、製造・流通を担うのか（JAの役割に期待）。
- 耕種側における堆肥の一時保管場所の確保・整備、マニュアルスプレッダーなどの散布機械の導入等に対する支援が重要。

【共通】

- 耕種農家における堆肥による土づくり、畜産農家における飼料用米・WCSを含むTMR給与などの技術指導、耕畜を結ぶコーディネートやマッチングなどの面で、府県（振興局等）、市町村・JA等関係機関の一層の関与が重要。

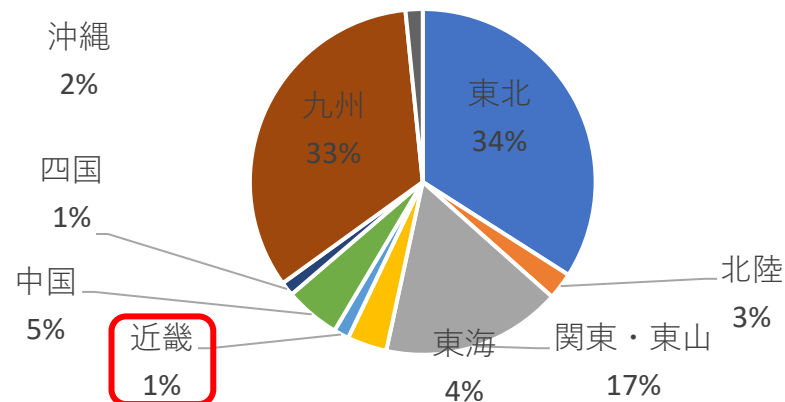
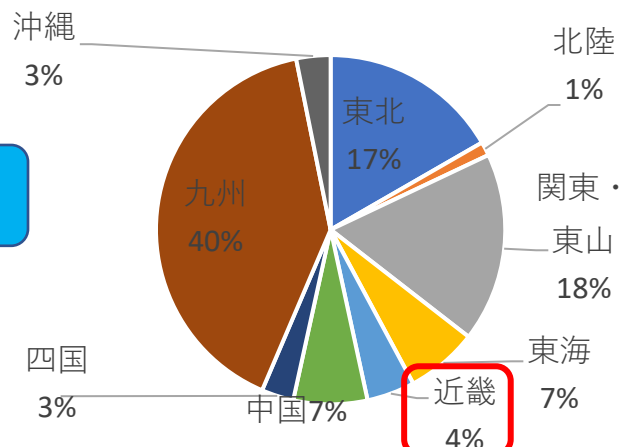
牛飼養頭数と飼料作付面積の割合（都府県・近畿）

- 都府県における近畿の牛飼養頭数の割合が4%である一方で、飼料作付面積の割合は1%に過ぎず、他の地域に比べ購入飼料への依存度が高いことがうかがえる。
- 近畿における飼料作付面積は、牛飼養頭数と同様に、兵庫、滋賀、京都、奈良、和歌山、大阪の順となっており、特に、滋賀と京都が頭数の割合を上回っている。

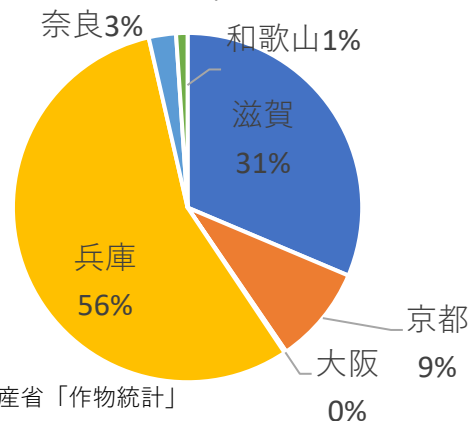
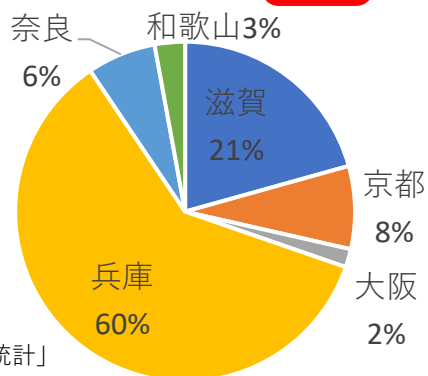
牛飼養頭数割合（令和4年）

飼料作物作付割合（令和2年産）

都府県



近畿



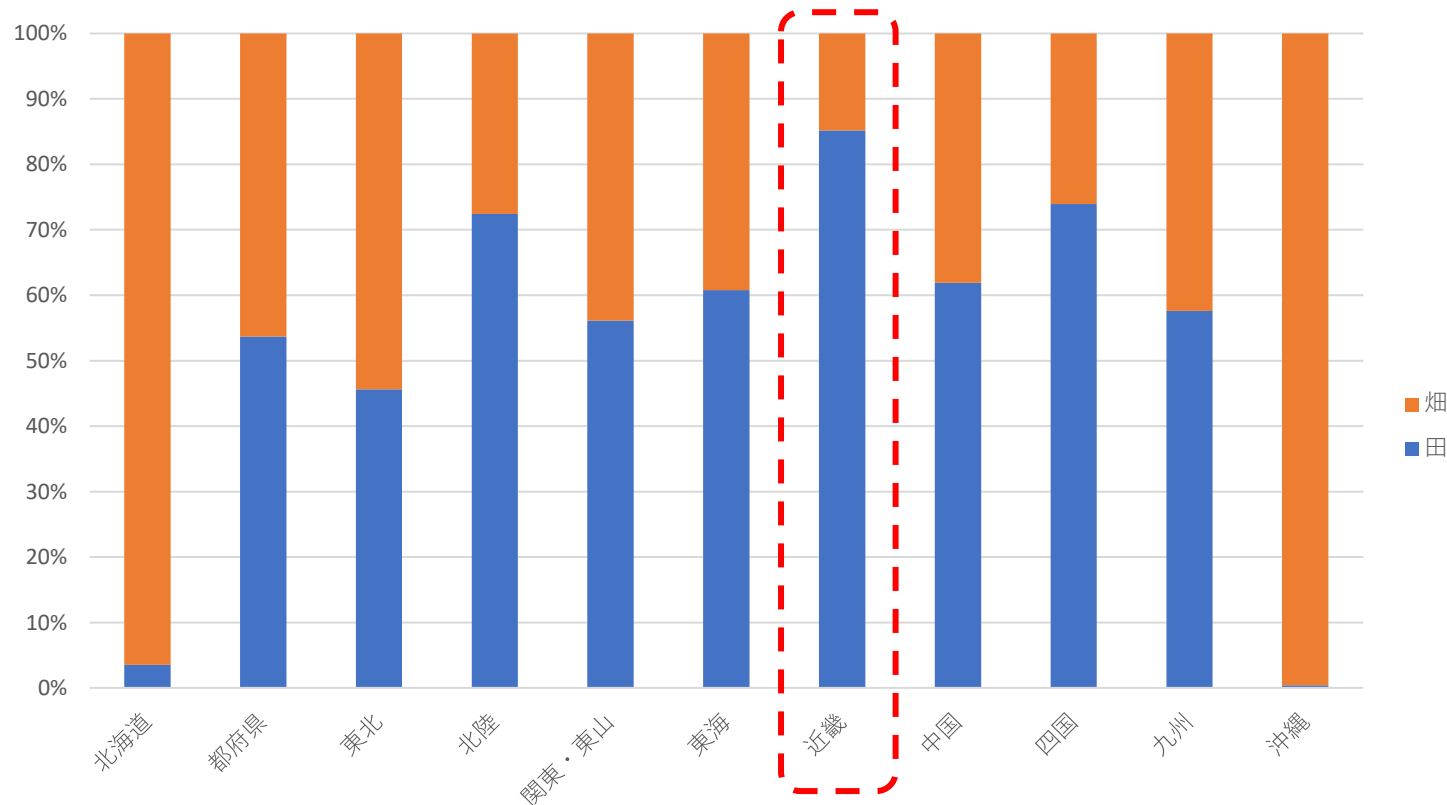
資料：農林水産省「畜産統計」

資料：農林水産省「作物統計」

飼料作物の田畑別作付割合（全国）

- 令和3年産の田の飼料作物作付割合を地域別にみると、都府県の平均が53.4%となっている中で、近畿は85.2%と全国で最も高い。

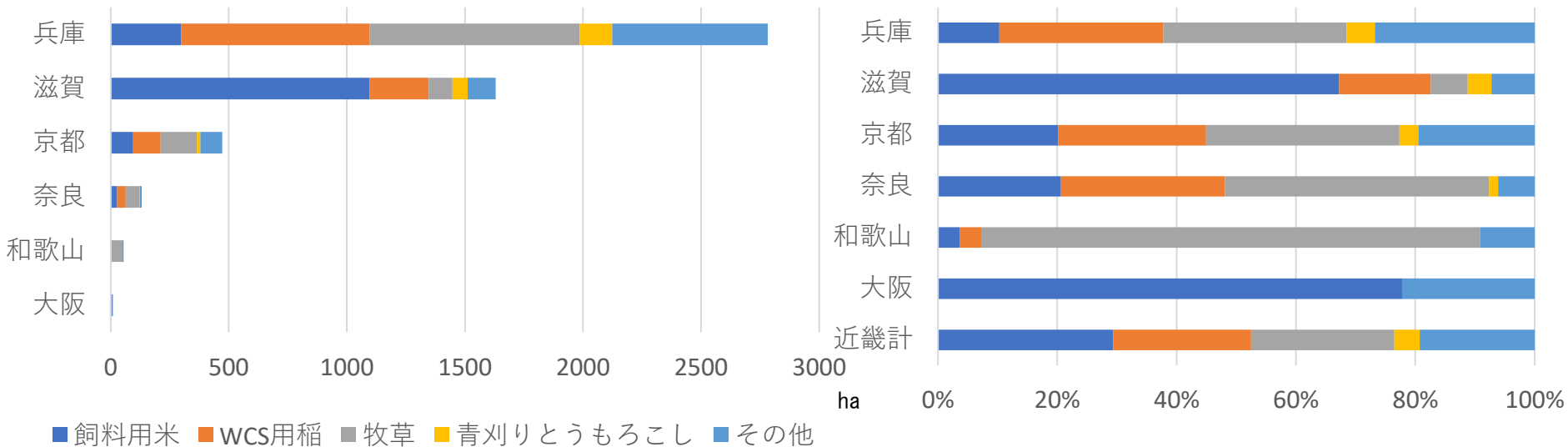
飼料作物の田畑別作付割合（令和3年産）



各府県別の水田飼料作の状況（近畿）

- 令和2年産の水田飼料作の内訳は、近畿全体でみると、飼料用米（29.4%）とWCS用稲（23.1%）が合わせて過半を占める一方、青刈りとうもろこしの割合は4.2%とわずか。
- 府県別にみると、兵庫では牧草、WCS用稲、その他（ソルゴー）がそれぞれ約3割を占めているのに対し、滋賀では飼料用米が約7割を占めている。

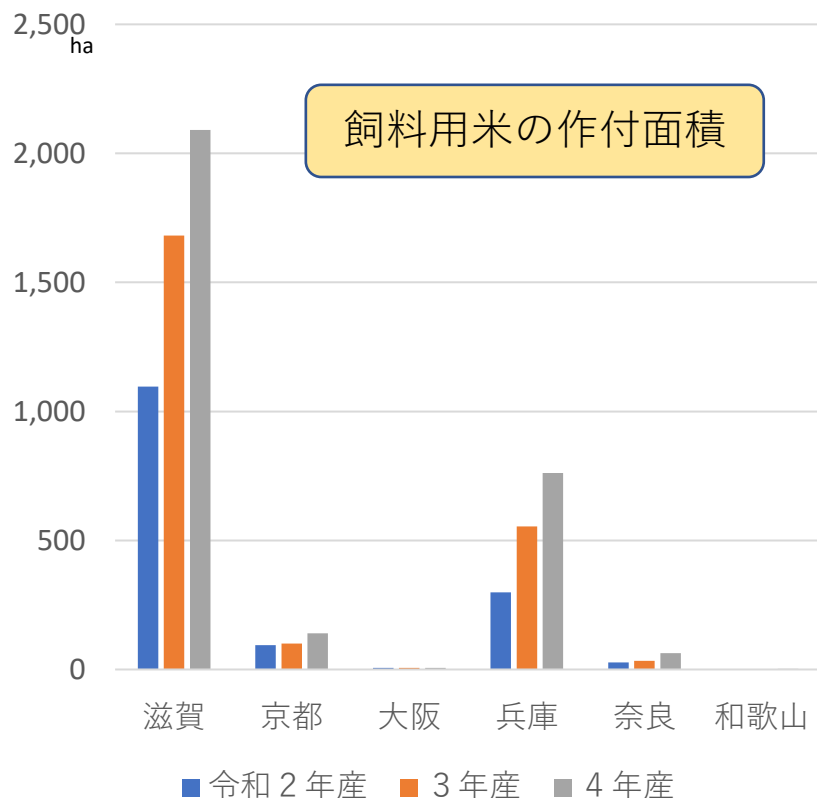
各府県別の水田飼料作の状況（令和2年産）



資料：農林水産省「作物統計」、農産局『新規需要米の取組計画認定状況』

飼料用米及びWCS用稲の作付面積の推移（近畿）

- 令和3年産の飼料用米及びWCS用稲の作付面積は、ほとんどの府県で前年より増加（特に、飼料用米は滋賀県で、WCS用稲は兵庫県での増加が大きい）。
- 令和4年産（9月15日現在の作付状況）についても、飼料用米については上位4府県で、WCS用稲については上位3府県で、前年より顕著に増加。



資料：農林水産省 農産局『新規需要米の取組計画認定状況』、令和4年産については各府県より聞き取りした数値